



# 日本植物分類学会 ニュースレター

No. 26

Aug. 2007

## 目 次

田村道夫先生ご逝去のお知らせ.....	2
諸報告.....	2
平成 19 年度野外研修会実施報告.....	2
岡山はちょっと違う?!.....	3
自然史学会連合担当報告.....	4
庶務報告 (2007 年 5 月~7 月).....	5
お知らせ.....	5
第 7 回 (平成 20 年度) 日本植物分類学会賞 (学会賞および奨励賞) の受賞候補者の募集.....	5
日本植物学会シンポジウムのお知らせ.....	6
評議員会開催のお知らせ.....	7
日本植物分類学会第 7 回大会 (2008 年) のお知らせ.....	7
第 8 回大会開催地の募集.....	8
平成 19 年度日本植物分類学会講演会のお知らせ.....	8
国際植物命名規約 (ウィーン規約) 2006 [日本語版] のご案内.....	8
書評依頼図書.....	9
研究費助成公募等のお知らせ.....	9
尾瀬国立公園指定植物案の検討および情報提供のお願い.....	10
寄稿.....	16
「International Paleobotanical Symposium in Stockholm」報告.....	16
本の紹介.....	17
「体系への情熱—リンネと自然の体系への情熱」.....	17
大学出版部協会編「ナチュラルヒストリーの時間」.....	17
いきもの便り.....	18
くさいコケの話・2.....	18
韓国の美味しい種・3.....	19
会員消息.....	20

## 田村道夫先生ご逝去のお知らせ

会長 邑田仁

元植物分類地理学会会長田村道夫先生は2007年6月22日、79歳で逝去されました。ここに謹んでお知らせいたします。

田村先生はキンポウゲ科の専門家で大阪大学助教授、神戸大学教授、近畿大学教授を歴任し、多数の論文を発表されました。1995年にはDie natürlichen Pflanzenfamilienのキンポウゲ科をまとめられました。田村先生の追悼文は「分類」に掲載いたします。

田村先生のご冥福をお祈り申し上げます。

## 諸報告

### 平成19年度野外研修会実施報告

池田博（岡山理科大学）

平成19年度の野外研修会は、5月26、27日の2日間にわたり、岡山県西部にある「阿哲地域」でおこなわれました。阿哲地域には、この地域に固有な植物や大陸系と言われる植物が多くみられ、独特のフロラを形成しています。参加者は33名と、例年になく多くの方に集まっていただきました。

1日目は、高梁市と新見市の境界付近を流れる佐伏川沿いで観察をおこないました。流域全体が石灰岩で、道沿いや崖の岩の間に多くの植物が生えていました。特に、ケグワの大木が数多くあり、ちょうど実をつけていました。また、チョウジガマズミも実をつけていました。その他、ナツノハナワラビ、オクマワラビ、ヤマハコベ、フタリシズカ、スズシロソウ、キジムシロ、ビロウドイチゴ、ナ



図2. 左：ケテイカカズラ。右：フタリシズカ。

ツアサドリ、アオイスミレ、ナガバタチツボスミレ、コバノハナイカダ、ジュウニキランソウ、ヌカボシソウ、マムシグサ、ヒカゲスゲ、サツマスゲ、ササノハスゲ、コジュズスゲ、シラコスゲ、ベニイトスゲ、ニシノホンモンジスゲなどの植物が観察できました。

夜は、高梁市サイクリングターミナル「神原荘」で懇親会がおこなわれました。懇親会では、多くの方が岡山の地酒を飲みながら盛り上がりしていました。（私も含めて）何人かは夜中の12時ごろまで楽しんでいたようです。

2日目は、備中町の二又瀬（ふたまたせ）と磐窟溪（いわやけい）、穴門山（あなとやま）神社で植物を観察しました。二又瀬では、ちょうどケテイカカズラやヤマイバラが花盛りで



図1. 佐伏川沿いに観察する参加者。

よい香りを漂わせていました。ナガバヤクシソウはまだ花をつけていませんでしたが、はじめて目にされた方も多かったのではないかと思います。ビッチュウヒカゲスゲは、4年前に記載されたばかりのスゲです。その他、ケキンモウワラビ、イワシデ、コバノチョウセンエノキ、コンロンソウ、ビワ、チョウジザクラ、ノイバラ、ヤマアイ、チョウセンヒメツゲ、ヨコグラノキ、ヒゴアオキ（ナンゴクアオキ）、ヤマムグラ、ミヤマナルコユリなどを観察しました。

昼食をとるため寄った磐窟溪では、岩場にゲンカイツツジが生え、落葉樹林にはミツデカエデやアオイカズラなどがみられました。また、川沿いにはキブネダイオウが生えていました。

和やかに昼食をとった後、最後の観察地である穴門山神社に向かいました。ここでは斜面一面に生えるフタバアオイの群落が見事でした。その他、サイゴクイノデ、オンガタイノデ、オニイノデ、オオヒメワラビ、ヤマミズ、マタタビ、ヤマブキソウ、コガクウツギ、ガクウツギ、ヘビイチゴ、チドリノキ、ハナイカダ、ヤブデマリ、ツルカノコソウ、アズマガヤなどを見ることができました。この穴

門山神社で解散とし、皆さん帰路につかれました。

研修会前日は大雨で天候の具合を心配していましたが、研修会中は雨も降らず快適な観察ができたのではないかと思います。主催者（池田）の杜撰な計画といい加減な運営にもかかわらず、参加者の皆さんのご協力により、大きなトラブルもなく終えることができましたことを感謝いたします。今回はあいにくと端境期で、多くの花を見ることはできませんでしたが、阿哲要素植物のおもしろさの一端を感じていただけましたら幸いです。

研修会実施に際しましては、岡山県内の多くの植物の研究者、愛好家の方にご協力いただきました。ここに記して感謝申し上げます。



図3. 記念写真。

## 岡山はちょっと違う？！

浜田 展也（広島県立庄原格致高等学校）

私は広島県の帝釈峠を中心に広島県東部のフロラなどを調べているので、当然岡山県の石灰岩地帯には何度か足を運んでいた。今回の研修会で訪れた場所も新見市の草間以外は一度は行ったことのある場所だ。しかし、全国各地から来られる会員の方と一緒に歩けば、また違った発見があるかもしれないと期待して参加した。広島県と岡山県は隣り合っており、石灰岩地帯が繋がっている。しかし、岡山県にはたくさん見られるのに広島県にはほとんど無い植物がいくつかある。チトセカ

ズラはその代表的なものだ。なぜこのようなことが起こるのか、広島と岡山の違いは何なのだろうか。

集合場所の有漢ICまで新見市の石灰岩地帯を縫うように車を走らせ、時折止まってはチトセカズラ、タツナミソウ、オヤマムグラなどを採集し、有漢ICに到着。今回の研修会のお世話をしていた、岡山理大の池田博先生がこられたので、いざ出発というときに、邑田仁会長が私の車に同乗されることになり、少し緊張して現地へ出発した。

1日目の新見市草間の佐伏川流域では、ケグワがちょうど花をつけており、コバノチョウセンエノキやテリハキンバイ、イロハモミジなども採集する。石灰岩地帯によく出現するベニイトスゲをしっかりと覚えようと、岡山理大の正木智美さんに教えていただいた。「これです！」と現物で教えていただくと非常に分かりやすい。そのほかにもいくつかスゲを教えていただくが、すぐ混乱してわからなくなる。実は私もスゲの会の会員なのだが、なかなかスゲが覚えられない不良会員なのだ。

夜の懇親会では姫路の橋本光政さんから「マンサクの萼の色は？」と聞かれた。以前から気になっていたことだったので話がはずみ、写真を送りますと約束した。(まだ送ってません。橋本さんもう少しお待ちください) 池田先生からも「ナガバノヤクシソウがおもしろそうなので一緒にやりませんか？」と声をかけていただき、いろいろお話を聞くことができた。岡山と広島ではちょっと違うのではないかということであった。

2日目は高梁市の二又瀬と磐窟溪、穴門山神社を訪れた。二又瀬はチョウセンヒメツゲやケキンモウウラビなど石灰岩壁の植物がよくそろっている。ここにもチトセカズラがあり、たくさん花をつけている。岡山理大の星野卓二先生にビッチュウヒカゲスゲを教えていただき、「広島県にもあるかもしれないので気をつけてみてください」とハッパをかけら

れる。2003年に記載されたばかりの種だろうで、根茎の太さとタヌキのしっぽのような花穂が印象的だった。

磐窟溪ではキブネダイオウを教えていただき、その大きさに「ちょっと標本にするには…」と思っていたら、その半月後に知人から「マダイオウを採ってきたので標本にして。」といわれ閉口した。

穴門山神社はウスバアザミのタイプ産地で、以前見に来たことがあったが、季節を変えてみると春の植物の名残などもあり、おもしろい。ため池の上流にできた湿地にスゲがたくさんあり、ここでもスゲを教えていただく。

2日間でスゲを少し覚えられたこと(星野先生、正木さんありがとうございました)、さまざまな会員の方と野山を歩きながらお話ができ、学会の大会とは違った視点で勉強することができた。しかし、目的であった広島と岡山の石灰岩地帯の違いはというと、結局よく分からない。確かにチトセカズラがどこに行ってもあることや、イロハモミジが多いことなどは確認できたし、オヤママグラなど広島のものとは形態が少し異なるものがあることにも気づいた。環境の違いはそんなに無いように見え、すぐお隣で、つながった石灰岩地帯なのに何が違うのだろうか。もっと腰を据えて調べてみたい。

お世話いただいた池田先生をはじめ、岡山理大の皆さんありがとうございました。

## 自然史学会連合担当報告

自然史学会連合担当委員 西田 治文

日本学術会議の新体制発足に伴い、自然史学会連合は、単独の学会からは提案しにくい意見を集約して学術会議に提示することを重要な存在意義のひとつに掲げることになりました。その一環として、学術会議二部で活動中の自然史・古生物研究委員会と連携し、現在検討されつつある博物館法の見直しについて、意見交換をしています。今後も、自然史学会連合を学術会議への大きな窓口として利用できるよう、分類学会会員諸氏の積極的な意見をお待ちします。

また、11月25日(日)には、琵琶湖博物館にて講演会「みず・ひと・いきものの歴史と今」(仮題)を企画しています。詳細は9月中旬以降に連合ホームページでご確認下さい。

## 庶務報告 (2007年5月～7月)

庶務幹事 五百川 裕

庶務報告では学会が交わした契約、転載許可、連絡、行った会議などで、ニュースレターの他の記事で紹介されていないものをお知らせしています。

- ・植物分類地理学会元会長 田村道夫氏葬儀にあたり弔電を送った (6月25日)。
- ・特許庁からの特許法30条に基づく指定学術団体に対する活動状況調査に対して、報告書を作成し送付した (6月29日)。
- ・情報・システム研究機構国立情報研究所からのNII-ELS (電子図書館) コンテンツの機関リポジトリでの利用許諾についての依頼に対して、評議員会で検討中との回答をした (7月2日)。
- ・滋賀県からのAPG掲載論文の図を使用した「琵琶湖ハンドブック」のホームページ公開にともなう転載許可申請に対して、許諾書を発行した (7月5日)。
- ・国立科学博物館筑波実験植物園からの企画展「絶滅危惧植物展」への協力依頼に対して、承諾の回答をした (7月27日)。

## お知らせ

### 第7回 (平成20年度) 日本植物分類学会賞

#### (学会賞および奨励賞) の受賞候補者の募集

会長 邑田 仁 学会賞選考委員長 西田 治文

#### 「日本植物分類学会賞」

分類学に関するさまざまな内容の調査及び研究を通して本学会の発展に貢献された会員を顕彰します。

#### 「日本植物分類学会奨励賞」

優れた研究業績をあげた将来有望な研究者 (学生を含む) を顕彰します。

以下の要領で受賞候補者を募集致しますので、自薦、他薦を問わず、会員の皆様の積極的な応募・推薦を期待しております。なお、受賞候補者の選考は「学会賞についての細則」に定める学会賞選考委員会で行います。特に、会員資格、年齢規定などにご注意下さい。

#### 募集要領

1. 資格：学会賞選考規定 (下記) を参照ください。
2. 応募方法：他薦の場合は、推薦する候補者の氏名と推薦理由をお知らせ下さい。必要な資料があれば選考委員会から候補者に提出を依頼します。自薦の場合は、以下の事項をA4用紙に記入して (書式は自由) お送りください。応募は、郵便またはE-mail でお願ひします。
3. 記入事項：(自薦の場合)
  - (1) 日本植物分類学会賞、日本植物分類学会奨励賞のどちらの応募か明記してください。(例：日本植物分類学会賞応募)
  - (2) 候補者の略歴 (生年月日、学歴、職歴)
  - (3) 調査・研究業績の概要

(4) 業績リスト（著書，論文，他）と本学会大会での発表記録。できれば代表的な業績の別刷またはコピーを添付してください。

4. 書類送付・問い合わせ先：

〒112-8551 文京区春日 1-13-27  
中央大学工学部 西田治文 宛  
TEL: 03-3817-1886 FAX: 03-3817-1880  
e-mail: helecho@kc.chuo-u.ac.jp

5. 応募締切日：平成 19 年 11 月 30 日

6. その他：両賞の受賞者は平成 20 年春の日本植物分類学会大会において表彰されます。また原則として同大会において受賞講演を行っていただきます。

-----  
学会賞選考規定（抜粋）

第 2 条 「日本植物分類学会賞」は植物分類学および日本植物分類学会の発展に特に顕著な貢献が認められたものに授与する。受賞者の資格は、「日本植物分類学会賞」については 10 年以上継続して本会会員である者とする。

2. 「日本植物分類学会奨励賞」は受賞年の 4 月 1 日において満 38 歳以下で、優れた研究業績をあげた将来有望な研究者（学生を含む）に授与する。受賞者の資格は 3 年以上連続して本会会員であり、主要な研究業績の一部を本会の大会または雑誌に発表している者とする。

第 3 条 受賞者の数は原則として「日本植物分類学会賞」2 名、「日本植物分類学会奨励賞」若干名とし、受賞者には賞状および副賞を授与する。

## 日本植物学会シンポジウムのお知らせ

植物分類学関連学会連絡会・日本分類学会連合担当委員 菅原 敬

秋の日本植物学会では、植物分類学関連学会連絡会共催で下記シンポジウムを開催します。このシンポジウムでは、最終氷期最盛期に高山帯，冷温帯，照葉樹林帯といった各植生帯のレフュジアが日本列島のどこにあったのかという課題について、花粉分析や分子データから得られている情報を整理し、日本列島のフロラ成立過程について考察を進めていきます。みなさまの参加をお待ちしています。

シンポジウム（東京理科大学野田キャンパス講義棟 J 会場）

（9 月 8 日 9 時 00 分～12 時 00 分）

第四紀における日本列島フロラの成立過程～Refugia はどこに？～

植物分類学関連学会連絡会共催シンポジウム

後援 総合地球環境学研究所プロジェクト 5-3

オーガナイザー 藤井紀行（熊本大・院・自然科学），菅原 敬（首都大・牧野標本館）

9:00 シンポジウムの趣旨説明 藤井紀行（熊本大・院・自然科学）

9:05 2aSJ1 第四紀の環境変化と植生変遷 百原 新（千葉大・園芸）

9:35 2aSJ2 化石花粉からみた最終氷期最盛期における日本列島の植生と Refugia  
高原 光（京都府立大・院・農学）

- 10:05 2aSJ3 高山帯こそが重要な Refugia ～第四紀の気候変動と日本列島 高山植物の分布域変遷の歴史～ 池田 啓 (京大・院・人環, 日本学術振興会特別研究員 DC1)
- 10:35 2aSJ4 温帯林構成種についての系統情報を用いない複数種比較による考察 岩崎貴也 (首都大・牧野標本館, 日本学術振興会特別研究員 DC1)
- 11:05 2aSJ5 植物とそれに付く植食性昆虫の DNA 多型にもとづく照葉樹林の分布変遷 青木京子 (京大・院・人環, 日本学術振興会特別研究員 PD)
- 11:35 総合討論
- コメンテーター 湯本貴和 (総合地球環境学研究所), 梶田 忠 (千葉大・理・生物)

## 評議員会開催のお知らせ

庶務幹事 五百川 裕

下記の通り評議員会を開催します。評議員、幹事会等の関係各位の出席をお願いいたします。なお、この日は会場の東京理科大学野田キャンパスにおきまして日本植物学会第71回大会が開催されております。

日時：2007年9月8日(土) 12時00分～13時30分

会場：東京理科大学野田キャンパス講義棟G室

審議事項：大会発表者資格、学術情報レポジトリへの対応、学会保管図書取扱い、会員メンバーリスト整備など。

審議事項についてご意見、ご希望などがございましたら、評議員、会長、幹事、各委員会委員長のいずれかにお伝えください。

## 日本植物分類学会第7回大会(2008年)のお知らせ

庶務幹事 五百川 裕

日本植物分類学会第7回大会は次の通り開催する予定です。なお、大会の詳細および参加申し込み等のご案内は、次号のニュースレター(11月号)でお知らせいたします。

1. 会場 首都大学東京・南大沢キャンパス (東京都八王子市南大沢 1-1)  
6号館 110教室 (大会会場・総会), 首都大学生協 (懇親会)
2. 日程 3月20日(木) 夕方 評議委員会  
3月21日(金) 午前 口頭発表 (大会発表賞エントリー者)  
午後 ポスター発表, 口頭発表  
3月22日(土) 午前 口頭発表 午後 記念講演, 総会, 懇親会  
3月23日(日) 午前 口頭発表  
午後 公開シンポジウム(仮題)「牧野富太郎博士の植物研究とその継承」
3. 大会に関する連絡先 村上 哲明  
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1  
首都大学東京・牧野標本館  
TEL: 042-677-2423  
FAX: 042-677-2421  
e-mail: nmurak@center.tmu.ac.jp

(大会専用のメールアドレスは、次号のニュースレターでお知らせします。)

## 第 8 回大会開催地の募集

庶務幹事 五百川 裕

日本植物分類学会第 8 回大会（2009 年）の開催地を募集いたします。大会開催にあたっては、講演会場（200 名程度まで収容可能な広さ）、クローク、本部、休憩室、ポスター発表会場等のスペースが必要となります。また、大会中に評議員会等の会議室をお借りすることになります。大会前の準備としては、大会案内と大会申込書の作成、プログラム編成、要旨集の編集・発行、懇親会会場の選定などがあります（大会準備に関するマニュアルが代々の大会準備委員会により引き継がれています）。大会運営は学会からの補助金（10 万円）と参加費で行っていただきます。大会開催をお引き受け下さる（あるいは場合によ

っては引き受けても良い）という会員の方がおられましたら、2007 年 10 月 20 日までに庶務幹事宛（下記）にご連絡をお願いいたします。ご参考までに、これまでの大会開催地（旧学会大会を含む）は学会ホームページ (<http://www.soc.nii.ac.jp/cgi-bin/jsps/wiki/wiki.cgi>) の「過去の大会プログラム」でご覧になることができます。

〒 943-8512 上越市山屋敷町 1  
上越教育大学学校教育学部内  
日本植物分類学会事務局  
(庶務幹事 五百川裕)  
TEL & FAX : 025-521-3430  
e-mail : iokawa@juen.ac.jp

## 平成 19 年度日本植物分類学会講演会のお知らせ

講演会担当委員 布施 静香

平成 19 年度の日本植物分類学会講演会は、次のとおり開催いたします。今年度のテーマは「Flora of Japan」です。1993 年から発行が始まった「Flora of Japan（講談社）」の執筆者数名に「原色日本植物図鑑（保育社）」や「日本の野生植物（平凡社）」と異なる点や対象植物に関するご研究等をご講演いただく予定です。演題など詳細につきましては次号のニュースレター（No.27）でご案内いたします。

【日時】2007 年 12 月 15 日（土）午前 10 時 20 分～午後 17 時 00 分

【講演会場】兵庫県立人と自然の博物館 ホロンピアホール

〒 559-1546 兵庫県三田市弥生が丘 6 丁目（電話：079-559-2001）

【会場までのアクセス】大阪駅から約 47 分（JR 三田駅で神戸電鉄に乗り換え）、

神戸電鉄「フラワータウン駅」下車徒歩約 5 分。

[http://hitohaku.jp/top/visitor\\_info.html](http://hitohaku.jp/top/visitor_info.html)

【講演者（五十音順）】岩槻邦男・大場秀章・勝山輝男・門田裕一・副島顕子・田村実・邑田仁・横田昌嗣

## 『国際植物命名規約（ウィーン規約）2006 [日本語版]』のご案内

国際植物命名規約邦訳委員会

植物の学名に関する国際的な取り決めである国際植物命名規約の最新版 *International Code of Botanical Nomenclature (Vienna Code) 2006* (McNeill et al. 2006 [eds.]) の日本語版です。国際植物命名規約はほぼ 6 年ごとに改訂され、規約は過去に遡って適用されるため、学名の取扱いは常に最新の規約に従う必要があります。翻訳は国際植物命名規約邦訳委員会が担当し、

国際植物分類学連合から日本語版として承認されています。

日本語版仕様： B5判 上製本（2007年11月刊行予定）

頒布価格： 1部 2,500円（送料込み）

※予約特価： 2007年10月30日までに申し込まれた場合に限り、1部2,000円（送料込み）。

申込方法： 次の必要事項をご記入の上、Faxまたはe-mailで申し込んでください。 1. 氏名、  
2. 送付先郵便番号、3. 送付先住所、4. 電話番号、5. FAX番号、6. e-mailアドレス、7.  
必要部数、8. 公費支払をご希望の方は必要書類と通数、宛先等の情報（例：見積書、請求書、  
納品書各1通）。

（申込先および問合せ先）：〒112-0001 東京都文京区白山3-7-1 東京大学大学院理学系研  
究科附属植物園 東馬哲雄，Fax 03-3814-0139，e-mail: nomen2006@ns.bg.s.u-tokyo.ac.jp

支払方法： 日本語版と同封して発送する郵便振替用紙でご送金ください。

## 書評依頼図書

庶務幹事 五百川 裕

下記図書の書評依頼が学会にまいりました。書評の執筆を希望される方は学会事務局まで電子メール (iokawa@juen.ac.jp)，またはハガキ等でご連絡ください。執筆者には当該図書を差上げます。

1. 藤井猛著 / 撮影（2007）「ビジターガイドブック花かおる八方尾根」116pp. ほおずき書籍 . 1050円（税込み）。
2. 北原一三著 / 撮影（2007）「ビジターガイドブック花かおる八ヶ岳」112pp. ほおずき書籍 . 1050円（税込み）。
3. 日本菌学会，日本藻類学会，日本放線菌学会，日本微生物資源学会，日本微生物生態学会，製品評価技術基盤機構 (NITE) 監修（2007）「微生物の世界」230pp. 丸善 . 12,600円（税込み）。

## 研究費助成公募等のお知らせ

庶務幹事 五百川 裕

下記の公募案内が事務局に届きました。詳細につきましては，各問い合わせ先に資料を請求されるか，ホームページをご覧ください。

### ・平成19年度福武学術文化振興財団歴史学・地理学助成

対象：歴史学・地理学，および地理学，歴史学の融合された研究分野

応募期間：平成19年8月20日～9月20日

問い合わせ先：〒206-8686 東京都多摩市落合1-34

財団法人 福武学術文化振興財団事務局

電話：042-356-0810，ホームページ：http://www.fukutake.or.jp

### ・平成19年度福武学術文化振興財団次世代歴史・地理教育支援助成

対象：歴史・地理，およびその融合された分野でのユニークな教育実践，振興，普及

応募期間：平成19年8月20日～9月20日

問い合わせ先：〒206-8686 東京都多摩市落合1-34

財団法人 福武学術文化振興財団事務局

電話：042-356-0810，ホームページ：<http://www.fukutake.or.jp>

・第11回尾瀬賞

対象：泥炭湿原の保全に関わる基礎的研究において、優れた業績を上げ、今後の研究の深化が期待される人。特に若手研究者の応募を歓迎する。

応募期間：平成19年4月1日～10月31日

問い合わせ先：〒371-8570 群馬県前橋市大手町1-1-1 群馬県庁内

財団法人 尾瀬保護財団事務局「尾瀬賞」係

電話：027-220-4431，E-mail: [info@oze-fnd.or.jp](mailto:info@oze-fnd.or.jp)

## 尾瀬国立公園指定植物案の検討および情報提供のお願い

黒沢 高秀（福島大学）

今年の8月下旬に尾瀬地域が日光国立公園から分離し、周辺の会津駒ヶ岳、田代山・帝釈山地域と合わせて「尾瀬国立公園」として指定されることとなりました。それに伴い、環境省日光自然環境事務所の依頼で、特別地域で採取等が規制される指定植物の選定を、今年中を目処に進めています。これまでに文献と福島大学共生システム理工学類標本室FKSEの標本に基づくリストを作成し、それを元に原案を作成しました。しかし、文献調査の過程で、尾瀬以外の地域では植物相に関する組織的な学術調査は行われておらず、十分な情報が見込めないことがわかりました。自然公園の植物の保護のためには、しかるべき植物をきちんと漏れなく指定植物に選定しておく必要があります。そこで日本植物分類学会会員各位にご専門を活かしてご検討いただければ、より良い案をとりまとめることができるのでは、と思ひ至りました。どうかお力をお貸し下さい。ニュースレターの場をお借りして原案を提示させていただきますので、「この植物が抜けているのはおかしい」等のご意見や情報（できる限り、出典や証拠標本の情報と共に）がありましたらお寄せ頂くようお願いいたします。紙面の都合上、学名等を省きましたが、学名入りのリストを希望の方にはお送りします。また、文献とFKSE標本に基づく植物リストは『福島大学地域創造』第19巻1号（2007年9月出版予定）に掲載の予定ですが、希望の方には電子ファイルまたは冊子体でお送りします。なお、コケ植物については別途検討する予定です。

連絡先 〒960-1296 福島市金谷川1 福島大学共生システム理工学類 黒沢高秀

TEL: 024-548-8201 e-mail: [kurosawa@sss.fukushima-u.ac.jp](mailto:kurosawa@sss.fukushima-u.ac.jp)

尾瀬国立公園の範囲等の詳細については、環境省「報道発表資料—平成19年6月5日—国立公園の指定及び公園計画の決定等に関する意見の募集について」<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=8444> のページからダウンロードできる添付資料をご覧ください。ダウンロードできる環境にない方で、ご検討頂ける方には、打ち出した資料をお送りします。

### 尾瀬国立公園指定植物案

科は基本的にエングラの体系に従った。科内は学名順に並んでいる。和名と学名は「YList」（米倉・梶田・2003. BG Plants 和名-学名インデックス <http://www.bg.s.u-tokyo.ac.jp/bgplants/download.php>）に従った。他の国立公園指定植物リストで用いられている別号等は（ ）内に記した。\* は日光国立公園の指定植物であることを示す。[ ]内は選定要件で、以下のような

略号を用いた。1a) 固有・隔離分布, 1b) 準固有, 1c) 北限・南限, 2) 希少, 3) タイプ産地, 4a) 高山蝶等の食草, 4b) 食虫植物, 4c) 腐生植物, 4d) 着生植物, 5a) 火山生, 5b) 岩壁生, 5c) 石灰岩・蛇紋岩生, 5d) 岩屑地生, 5e) 雪崩斜面生, 5f) 砂丘生, 5g) 風衝地生, 5h) 風穴生, 5i) 雪田生, 5j) 湿原生, 5k) 池塘生, 5l) 塩沼地生, 6) 主要景観構成植物, 7) 園芸業者採取

## シダ植物

ヒカゲノカズラ科 \*コスギラン [2,5i], \*ミヤマヒカゲノカズラ(チシマヒカゲノカズラ)[2,5i], スギカズラ(シンノスギカズラ) [2], \*マンネンスギ(ウチワマンネンスギ, タチマンネンスギ) [7], \*ヤチスギラン [2,5j], \*タカネヒカゲノカズラ [5i]

イワヒバ科 コケスギラン [2]

ミズニラ科 \*ヒメミズニラ [2,5k]

ハナヤスリ科 ミヤマハナワラビ [2], \*ヤマハナワラビ(エゾフユノハナワラビを含む) [2,7]

シンガシラ科 \*ミヤマシシガシラ(アオジクミヤマシシガシラを含む) [2]

オシダ科 \*ナンタイシダ [1b,2], \*オクヤマシダ [2]

ヒメシダ科 \*タチヒメワラビ [2], \*ニッコウシダ [5j,6]

イワデンダ科 \*イワイヌワラビ [2,5b], ヤマヒメワラビ [2], \*ウサギシダ [2], \*イワウサギシダ [2,5k,6]

ウラボシ科 \*ホテイシダ [4d,5b], イワオモダカ [2,7]

## 裸子植物

ヒノキ科 \*ミヤマビャクシン(ソナレ, ミヤマハイビャクシン) [2,5b,6,7], \*ミヤマネズ(ホンドミヤマネズを含む) [5b,6,7]

マツ科 ウラジロモミ(ダケモミ) [2], シラビソ(シラベ) [2], トウヒ [1c 北限,2], \*ハイマツ [5i,6,7]

イチイ科 \*イチイ(キャラボクを含む) [2,6,7]

## 被子植物 双子葉類 離弁花類

ヤマモモ科 \*ヤチヤナギ [5j,6]

ヤナギ科 コゴメヤナギ [2], \*シライヤナギ [1a,2,5b]

イラクサ科 エゾイラクサ(オオバイラクサ) [2]

タデ科 \*イブキトラノオ [5e,6], タカネスイバ [2]

ナデシコ科 \*カトウハコベ [1a,2,5c], \*ホソバツメクサ(コバノツメクサ) (2, 5c, 6), \*タカネナデシコ [2,5bde,6], ワダソウ [2], \*センジュガンピ [2,6], \*シラオイハコベ(エゾフスマ) [2], カンチャヤチハコベ [2,5j], イトハコベ [2]

マツバサ科 チョウセンゴミシ [2]

キンポウゲ科 \*オオレイジンソウ [5e,6], \*オクトリカブト(オゼトリカブト) [1b,6], \*レイジンソウ [2,6], ミヨウコウトリカブト [1c 北限,2], \*ヒメイチゲ [5gi], \*ハクサンイチゲ(ヒメハクサンイチゲを含む) [5ei,6], \*キクザキイチゲ(キクザキイチリンソウ) [6], \*サンリンソウ [2,5k,6], ヤマオダマキ(オオヤマオダマキを含む) [7], \*リュウキンカ(エ

- ンコウソウを含む) [5jk,6], \* ミヤマハンショウヅル (コミヤマハンショウヅル) [2,5b,6],  
 オウレン (キクバオウレン, セリバオウレンを含む) [6,7], \* バイカオウレン (ゴカヨ  
 ウオウレン) [6], \* ミツバオウレン [5i], \* ミツバノバイカオウレン (コシジオウレン) [5i],  
 アズマシロカネソウ [2], \* シラネアオイ [2,5e,6,7], \* オキナグサ [2,6,7], \* ミヤマキン  
 ポウゲ [5ei,6], バイカモ [2], \* イトキンポウゲ [1b,2,5k], \* オゼキンポウゲ (シコタン  
 キンポウゲ) [1a,6], ヒメバイカモ [2], \* ハルカラマツ [1a,2], \* ミヤマカラマツ [5e,6],  
 \* シナノキンバイ [5ei,6]
- メギ科 \* サンカヨウ (マルバサンカヨウ) [5e,6,7], \* キバナイカリソウ (クモイイカリソウ  
 を含む) [1b,2,7], \* トガクシソウ (トガクシショウマ) [1b,2,5k]
- スイレン科 \* ネムロコウホネ (オゼコウホネを含む) [2], \* ヒツジグサ (エゾヒツジグサ) [5k,6]
- ウマノスズクサ科 \* ウスバサイシン (サイシン) [4a]
- オトギリソウ科 ヒメトモエソウ [2], ミヤコオトギリ [2]
- モウセンゴケ科 \* ナガバノモウセンゴケ [1a,2,4b,5j,6], \* モウセンゴケ [4b,5jk,6], \* サジバ  
 モウセンゴケ [1a,2,4b,5j]
- ケシ科 \* ホンシュウエンゴサク (本州産エゾエンゴサク) [6], \* コマクサ [2,5d,6,7], \* オサ  
 バグサ [2,6]
- アブラナ科 \* イワハタザオ (イワテハタザオ) (ウメハタザオを含む) [5de], オクヤマガラ  
 シ [2], \* ハクセンナズナ [2,5k,6]
- ユキノシタ科 \* アラシグサ [5ek,6], \* ヒメウメバチソウ [2,5i], \* ウメバチソウ (コウメバチ  
 ソウ) [2,5j,6], ヤシャビシャク [2], ザリコミ [2], \* ダイモンジソウ (ミヤマダイモン  
 ジソウ, ウチワダイモンジソウ) (ウラベニダイモンジソウを含む) [5be,6,7], \* クロク  
 モソウ [2,5be], \* フキユキノシタ [2,5k,6]
- バラ科 \* タカネザクラ (ミネザクラ) (チシマザクラを含む) [6], \* クロバナロウゲ [2,5jk,6],  
 \* ノウゴウイチゴ [5dei], \* シロバナノヘビイチゴ (モリイチゴ) [5d,7], \* ミヤマダイ  
 コンソウ [5bg,6], カラフトダイコンソウ [2], \* イワキンバイ [2,5bd], \* キンロバイ  
 [2,5b,6,7], \* ミヤマキンバイ [5bei,6], \* オオタカネバラ [2,6], \* タカネバラ (タカネイ  
 バラ) [2,6], ミヤマウラジロイチゴ (オオミヤマウラジロイチゴ) [2], \* コガネイチゴ [6],  
 ミヤマモミジイチゴ [2], ヒメゴヨウイチゴ (トゲナシゴヨウイチゴ) [2], \* ベニバナ  
 イチゴ [5i,6], \* タカネトウウチソウ (ケトウウチソウ) [5i,6], ナガボノワレモコウ (ナ  
 ガバナアカワレモコウ) [2], \* チングルマ (イワグルマ) [5dgi,6], タカネナナカマド [2],  
 \* マルバシモツケ [2,5bd,6], \* イワシモツケ [5d,6]
- フウロソウ科 \* ハクサンフウロ (アカヌマフウロ) (シロバナハクサンフウロを含む) [6]
- トウダイグサ科 \* ハクサンタイゲキ (オゼヌマタイゲキ) [2,5j]
- カエデ科 クロビイタヤ (シバタカエデを含む) [2], オオイタヤメイゲツ [2], ヒナウチワカ  
 エデ [2]
- モチノキ科 フウリンウメモドキ (オクノフウリンウメモドキを含む) [2]
- ニシキギ科 クロツリバナ [2], アンドンマユミ [1a,2,3,7]
- スミレ科 \* キバナノコマノツメ (ジョウエツキバナノコマノツメを含む) [5i], \* ウスバスミ  
 レ [2], \* オオバクスミレ [5e,6,7], チシマウスバスミレ (ケウスバスミレ) [2,5j], \* オオ

バタチツボスミレ (ヤチスミレ) (ケオオタチツボスミレを含む) [1a,2,5j], \* ミヤマスマ  
 ミレ (ハダカミヤマスマミレを含む) [5k], \* ミヤマツボスミレ [5i]  
 アカバナ科 \* ヤナギラン [6], \* ヒメアカバナ [2,5d], \* ミヤマアカバナ (コアカバナ) [5di],  
 シロウマアカバナ [2], ホソバアカバナ (ヤナギアカバナ) [2], \* ムツアカバナ [2,6]  
 アリノトウグサ科 ホザキノフサモ [2]  
 スギナモ科 \* スギナモ [2,5k]  
 ミズキ科 \* ゴゼンタチバナ [6]  
 セリ科 \* ミヤマトウキ (イワテトウキ, ナンブトウキ) [5b], ミヤマウド [2], エゾボウフウ [2],  
 ホタルサイコ [2], \* ハクサンサイコ [2,5c], セリモドキ (タニセリモドキ) [2], ミヤ  
 マヤブニンジン (オナガヤブニンジン) [2], \* ハクサンボウフウ [5i], シムラニンジン  
 [2], ヒカゲミツバ [1c 北限, 2], \* シラネニンジン (ホソバシラネニンジンを含む) [5ij],  
 \* ミヤマウイキョウ (ヤマウイキョウ) [5d]

#### 被子植物 双子葉類 合弁花類

イワウメ科 \* イワウメ [5bg,6], \* ヒメイワカガミ [2,5b,6], \* イワカガミ (コイワカガミ,  
 オオイワカガミを含む) [5b,6], \* イワウチワ (オオイワウチワ) [5b,6]  
 イチヤクソウ科 シャクジョウソウ [4c], \* コイチヤクソウ [2], \* コバナイチヤクソウ [2], \*  
 ベニバナイチヤクソウ (ベニイチヤクソウ) [6], \* ジンヨウイチヤクソウ [2]  
 ツツジ科 \* ヒメシャクナゲ (カラフトヒメシャクナゲ, シロバナノヒメシャクナゲを含む)  
 [2,5j], \* コメバツガザクラ [5bgi,6], \* イワヒゲ [5b], \* ミヤマホツツジ [6], \* サラサ  
 ドウダン (ベニサラサドウダンを含む) [6,7], \* イワナシ [5b], \* アカモノ (イワハゼ)  
 [5bi,6], \* ハリガネカズラ [2], \* シラタモノキ (シロモノ) [5bi], \* ヒメハナヒリノキ [5b,6],  
 \* ミネズオウ [5bg], \* ウラジロヨウラク (ツリガネツツジ, ガクウラジロヨウラク) (ア  
 ズマツリガネツツジを含む) [5g,6], \* アオノツガザクラ [5i,6], \* ツガザクラ [5b,6], \*  
 ムラサキヤシオツツジ (ムラサキヤシオ, ミヤマツツジ) [6], \* ハクサンシャクナゲ (ウ  
 ラゲハクサンシャクナゲ, シロシャクナゲ, シロバナシャクナゲ, ネモトシャクナゲ)  
 (ケナシハクサンシャクナゲを含む) [6], \* アズマシャクナゲ (シャクナゲ) [6,7], \* レ  
 ンゲツツジ [6,7], \* オオバツツジ [5j,6], サイゴクミツバツツジ [6,7], \* シロヤシオ (ゴ  
 ヨウツツジ) [6,7], \* コメツツジ (オオコメツツジを含む) [6,7], \* ヒメツルコケモモ [2,5j],  
 \* ツルコケモモ [5j], マルバウスゴ (シコクウスゴ) [2], \* コケモモ [5bei,6]  
 ガンコウラン科 \* ガンコウラン [5bgi,6]  
 サクラソウ科 \* ヤナギトラノオ [2,5jk], ハクサンコザクラ (ナンキンコザクラ) [2,6], \* ユ  
 キワリソウ [5bc,6], \* クリンソウ (シロバナクリンソウを含む) [5jk,7], \* オオサクラ  
 ソウ (ミヤマサクラソウ) [2,5k], \* ツマトリソウ (コツマトリソウを含む) [5j,6]  
 リンドウ科 \* トウヤクリンドウ [5gi,6], \* オヤマリンドウ [6], ミヤマリンドウ [2,7], \* タテ  
 ヤマリンドウ (シロバナタテヤマリンドウを含む) [5j], \* エゾリンドウ (ホロムイリン  
 ドウ, エゾオヤマリンドウを含む) [5j,6,7], \* ハナイカリ [2,5g,6]  
 ミツガシワ科 \* ミツガシワ [5jk,6], \* イワイチョウ [5jk,6]  
 ガガイモ科 スズサイコ [2]

- アカネ科 \* エゾノヨツバムグラ (オオバノヨツバムグラを含む) [6]。オオアカネ [2]  
ムラサキ科 エゾムラサキ [2]  
シソ科 ミヤマタムラソウ (ケナツノタムラソウ) [2], \* イブキジャコウソウ (イワジャコウソウ) [5bdf,6,7]  
ゴマノハグサ科 \* ミヤマコゴメグサ (ホソバコゴメグサを含む) [1b,5gi], \* ヨツバシオガマ [5i,6], \* オニシオガマ [5j], \* タカネシオガマ (シロバナタカネシオガマを含む) [2,5g,6], \* エゾシオガマ [5egi,6], ヤマクワガタ [2], テングクワガタ [2], \* クガイソウ (クカイソウ) [5d,6]  
ハマウツボ科 \* オニク (キムラタケ) [2,4 寄生]  
タヌキモ科 \* ムシトリスミレ [2,4b,5b,6], イヌタヌキモ [2,4b], \* ミミカキグサ [2,4b,5j], \* コタヌキモ [2,4b,5jk], \* ヒメタヌキモ [2,4b,5j], \* ヤチコタヌキモ [1a,2,4b,5jk], \* ムラサキミミカキグサ [2,4b,5j], タヌキモ [2,4b]  
スイカズラ科 \* リンネソウ [2,6], \* クロミノウグイスカグラ (ケヨノミ) [2,6], \* コウゲイスカグラ (チチブヒョウタンボクを含む) [2,6], アラゲヒョウタンボク [2]  
オミナエシ科 \* ハクサンオミナエシ (コキンレイカ) [2,5b]  
キキョウ科 \* ヒメシャジン [2,5b,6], ソバナ (シロソバナ (シロバナソバナ) を含む) [7], \* ツリガネニンジン (シラゲシャジン, ハクサンシャジン (タカネツリガネニンジン) を含む) [5d,6], \* ホタルブクロ (ヤマホタルブクロを含む) [7], \* サワギキョウ (シロバナサワギキョウを含む) [5j,6]  
キク科 \* チョウジギク (クマギク) [2,5ek], \* ヒメシオン [5j], \* オニアザミ (ハリオニアザミ) [6], \* オゼヌマアザミ [1a,2,3,5j,6], ジョウシュウオニアザミ [1c 北限,2], \* ジョウシュウアズマギク [1a,5b,6], \* ミヤマコウゾリナ [5de], \* ミズギク (オゼミズギクを含む) [5j,6], \* クモマニガナ [2,5bde], \* ホソバヒナウスユキソウ [1a,2,5b], \* ウスユキソウ (ミネウスユキソウを含む) [5bg], \* オタカラコウ [5k,6], \* カニコウモリ [6], オオバコウモリ [1c 北限], コウモリソウ [2], オオニガナ [2], \* シラネアザミ (ニッコウトウヒレン, クロトウヒレンを含む) [1,2,5b], \* ミヤマアキノキリンソウ (コガネバナ, コガネギク) (キリガミネアキノキリンソウを含む) [5beg,6]

#### 被子植物 単子葉類

- ホロムイソウ科 \* ホロムイソウ (エゾゼキショウ) [1b,2,5k]  
シバナ科 \* ホソバノシバナ [2,5j]  
ヒルムシロ科 エゾノヒルムシロ [2], センニンモ [2], ササエビモ [2], ヒロハノエビモ [2]  
ユリ科 \* ネバリノギラン [5e], \* シロウマアサツキ (シブツアサツキ) [2,5de,6], \* ツバメオモト [6], \* キバナノアマナ [6,7], \* ショウジョウバカマ [6,7], \* ゼンテイカ (ニッコウキスゲ) [5fgjk,6,7], トウギボウシ (オオバギボウシ) [7], \* タチギボウシ (コバギボウシを含む) [5j,6], \* オゼソウ [1a,2,3], \* キヌガサソウ [2,5e,6], \* コオニユリ [5j,6,7], \* クルマユリ [5e,6,7], \* チシマアマナ [5bgil], \* キンコウカ [5jk,6], \* クルマバツクバネソウ [2,6], \* ヒロハユキザサ (ヒロハノユキザサ, ミドリユキザサ) [5e], \* オオバタケシマラン (アラゲオオバタケシマラン) [5e], \* イワショウブ [5jk,6], \* タマガワホ

- トトギス (ニッコウホトトギス (ハゴロモホトトギス) を含む) [5k,6], \* エンレイソウ (クロミノエンレイソウを含む) [6,7], \* ミヤマエンレイソウ (シロバナエンレイソウ) [6,7], \* タカネアオヤギソウ (ムラサキタカネアオヤギソウを含む) [5g,6], \* コバイケイソウ (コバイケイ) (ウラゲコバイケイを含む) [5ejj,6]
- アヤメ科 \* ヒメシャガ [5b,7], \* カキツバタ [2,5jk,6], \* ヒオウギアヤメ [2,5jk,6]
- イグサ科 \* ミクリゼキシヨウ [5j], \* ミヤマホソコウガイゼキシヨウ [5i], \* タカネスズメノヒエ (ミヤマスズメノヒエ) [5ei]
- ホシクサ科 \* クロイヌノヒゲモドキ (オゼイヌノヒゲ) [2,5j], クロイヌノヒゲ (クシロホシクサ) [2], ユキイヌノヒゲ [1a,2,3], ハライヌノヒゲ [2,3]
- イネ科 \* ミヤマヌカボ [5g], タテヤマヌカボ [1c 北限], \* タカネコウボウ (ケタカネコウボウ) [1b,5d], \* ヒゲノガリヤス (オオヒゲガリヤス) [5ei,6], ムツノガリヤス [1c 南限], \* チシマガリヤス (ヒロハチシマガリヤス) [2,5j], \* ミヤマノガリヤス (タカネノガリヤス) [5g], \* ヤマオオウシノケグサ [2,5g]
- サトイモ科 \* ミズバショウ [5jk,6], \* ザゼンソウ (ダルマソウ) [5jk,6], \* ヒメザゼンソウ [5jk]
- ミクリ科 \* ホソバタマミクリ [5k,6]
- カヤツリグサ科 \* ミネハリイ [5k,6], ホスゲ [2], \* ヤチスゲ [5jk], \* トマリスゲ (ホロムイスゲ, クロスゲ) [5jk], ホソバオゼヌマスゲ [2], タカネハリスゲ (ミガエリスゲ) [2], キンスゲ (セイタカキンスゲ) [2], \* イワスゲ [2,5d,6], \* ヒロハオゼヌマスゲ [1a,2,3,5j], エゾハリスゲ (オオハリスゲ) [2], \* ヌイオスゲ (シロウマヒメスゲ) [2,5g], \* サギスゲ [5jk,6], \* ワタスゲ (スズメノケヤリ) [5jk,6], \* ミヤマイヌノハナヒゲ [5jk], \* タカネクロスゲ [5j]
- ラン科 \* コアニチドリ [2,5b,7], \* サルメンエビネ [2,7], \* キソエビネ [2,7], \* ササバギンラン [6,7], \* オノエラン [5bi], \* サイハイラン [6,7], \* トケンラン [2,7], キバナノアツモリソウ [2,7], \* ハクサンチドリ (シロバナハクサンチドリ, ウズラバハクサンチドリを含む) [5ei,7], \* イチヨウラン (ヒトハラン) [2,7], \* サワラン (アサヒラン) (キリガミネアサヒランを含む) [2,5j,6,7], \* コイチヨウラン [2], \* エゾスズラン (アオスズラン) [7], \* カキラン (スズラン) [5j,6,7], \* トラキチラン [2,4c], \* オニノヤガラ [4c], \* アケボノシュスラン [2,7], ツリシュスラン (ヒロハツリシュスランを含む) [2,6], \* ヒメミヤマウズラ [7], \* ノビネチドリ [6,7], \* テガタチドリ (チドリソウ) [6], \* オオミズトンボ (サワトンボ) (ヒメミズトンボ (チシマミズトンボ, オゼノサワトンボ) を含む) [2,5j,6], \* フガクスズムシソウ [2,4d,7], \* クモキリソウ [7], \* スズムシソウ [2,7], \* コフタバラン (フタバラン) [2], \* ミヤマフタバラン [2], \* ホザキイチヨウラン [2], \* ヤチラン [2,5j], \* アリドオシラン [2], \* コケイラン (ヒメケイラン) [2,7], \* タカネトンボ (タカネトンボソウ) [5e], ヒロハトンボソウ [2], \* ミズチドリ (ジャコウチドリ) [5j,6], \* ツレサギソウ [2], \* ヤマサギソウ [2], \* キソチドリ (オオキソチドリ (ミチノクチドリ) を含む) [2], \* ノヤマトンボ (オオバノトンボソウ) [2], \* オオヤマサギソウ [2], \* コバノトンボソウ [2,5ij], \* ホソバノキソチドリ [2], \* トキソウ [2,5jk,7], \* ヤマトキソウ [2], \* ヒトツボクロ [2,7], \* ショウキラン [4c]

## 寄稿

## 「International Paleobotanical Symposium in Stockholm」報告

高橋 正道 (新潟大学)

リンネの生誕 300 年記念式典が行われたスウェーデンで、もう一つの国際シンポジウムが開催されました。リンネ生誕 300 年祭に出席した天皇夫妻が、スウェーデン自然史博物館を訪れた 1 週間後のことでした。この国際シンポジウムは、スウェーデン自然史博物館の Else Marie Friis 教授の還暦の誕生日祝いを記念したもので、「In Search of the Earliest Flowers」というテーマで 2007 年 6 月 1 日～3 日に開催された。私は、今、ストックホルムからの帰路の機内で、この文章を書いています。

このシンポジウムに招待された講演者は、Margarett E. Collinson, Peter R. Crane, James A. Doyle, Peter K. Endress, Patrick S. Herendeen, Ruth A. Stockey など、植物分類学や古植物学分野では極めてなじみのある方々でした。一般の学会と異なり、一人が 45 分と言う十分

な時間の発表は、非常に内容のあるものでした。

Else Marie Friis は、ゆったりとした自分の研究室に私を招いて、マイクロ CT による研究成果を詳しく説明してくれました。Else Marie Friis が示した大型加速機による研究成果は驚くべき結果でした。日本で還暦とえば、「そろそろ、お歳ですよ」と言い渡されるような印象があるが、Else Marie Friis は、60 才にして、これから、急斜面の上り坂を駆け上がっていくような勢いでした。

シンポジウムのプログラムは、[http://www.nrm.se/download/18.14c432a7111ff6bba4f80001959/Earliestflowers\\_program.pdf](http://www.nrm.se/download/18.14c432a7111ff6bba4f80001959/Earliestflowers_program.pdf) でみることができます。なお、シンポジウムで発表された個々の研究成果は、IJPS の特集号に掲載される予定です。

## 編集後のひとこと

暑い日が続く中、皆さんいかがお過ごしでしょうか？札幌では蒸し暑い中、仕事がなかなか進みません。ビールがおいしいのはいいのですが…。そこで釧路のかみさんの実家にパソコンを持ち込んでみたら、仕事のはかどることはかどること！何しろここは過去に数回しか真夏日を記録したことがないところなので、夏は断然涼しいのです。それでも今日は釧路で久しぶりに晴れて暖かいというので、海に行ってきました。夏休み中とあって海は家族連れや若者でにぎわっていましたが、さすがに海の水は冷たく泳ぐには程遠いコンディションでありました。海岸の草原には、色とりどりの花が咲き誇っていて、まるでお花畑のようです。青紫のツリガネニンジン、黄色のオミナエシ、赤紫のタチギボウシやエゾフウロ、濃い紫のノハナショウブ、濃いピンク色のハマナス、白のナガボノシロワレモコウなどなど。花の種類から教えられるように、今年の夏ももうすぐ終わりですね。

ところで皆さんお気づきでしょうか？ニュースレター No. 24 の庶務報告でもお伝えしたように、国立情報学研究所が運営する電子図書館 CiNii で、日本植物分類学会の雑誌が公開されています ([http://ci.nii.ac.jp/organ/journal/INT1000001576\\_jp.html](http://ci.nii.ac.jp/organ/journal/INT1000001576_jp.html))。雑誌の抄録も google および google Scholar から検索できるようになっていますので、是非ご確認下さい。

By 編集人

## 本の紹介

### 「体系への情熱—リンネと自然の体系への情熱」

2007年はカール・フォンリンネの生誕300年にあたり、その記念としてスウェーデンのNatur & Kultur社から発刊されたこの本は、リンネの性分類体系による24綱の写真とその解説、そしてリンネの生涯をたどる物語と植物標本の写真で構成される。日本語版は東京大学名誉教授の大場秀章氏が監修している。日本では国立科学博物館で開催された「花展」のショップで販売されたのみで、書店では販売されておらず、購入希望の場合は下記受注担当者まで連絡する。価格は10,000円(航空便輸送料および手数料として2,000円が加算)。受注数量によっては割引価格があるとのこと。

受注担当：トーマス・グスタフソン (E-mail: Thomas.gustafsson@humbleways.com)

ホームページ：<http://www.nok.se/linne/> (本の紹介あり。こちらからの注文は海外送金で別料金となるので注意)  
(五百川 裕)

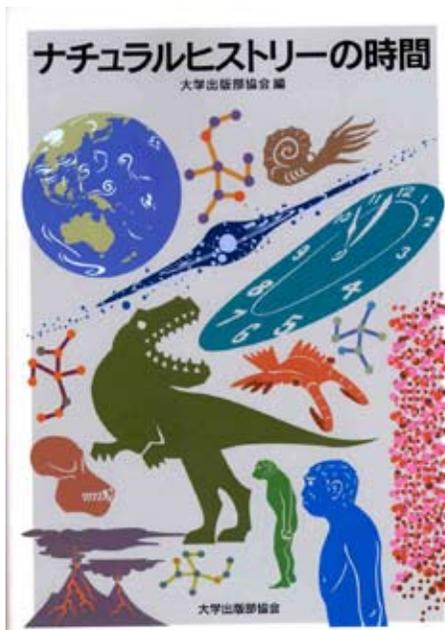
### 大学出版部協会編「ナチュラルヒストリーの時間」

日本でも大学の出版部が充実して来た。現在30大学の出版部が協会をつくっていて、その協会の企画として本書が刊行された。自然史への志向をうながす26のエッセイと6つのコラムをまとめたものである。ブックフェアに参加する出版部協会加盟の書店にしか並ばないとのことだから、自然史にかかわる人たちには周知したいと思い、紙面を借りて紹介する次第である。帯の宣伝文句を借りれば、「博物誌から生態学、多様性生物学、ゲノムサイエンス、そして21世紀のナチュラルヒストリーまでを愉しむ」本ということである。

大学出版部協会の最初の出版物がナチュラルヒストリーを題材とするものだというのは、東大、東海大、京大の出版部の編集者たちの前向きな取り組みのおかげであるが、そこで呼びかけられた25人の筆者たち(1編は「具体的な人間の日常性」と抽象化された「専門性・科学性」、と題された特別寄稿である)がその期待に答えているかどうか、分類学にかかわっている人たちこそが、それを専門的な立場で評価すべきであり、そうすることこそが、この種の企画の社会への発信に向けた役割を果たし、このような企画を立てた編集者と協働できる方法だろう。

viii + 144 ページで、定価は1600円+税、有限責任中間法人大学出版部協会の連絡先は113-0034 東京都文京区湯島2-14-11、☎ 03-3834-6686、ファックス 03-3834-6687、e-mail <mail@ajup-net.com> と紹介されている。

(岩槻 邦男)



## いきもの便り

## くさいコケの話・2

有川 智己 (慶應義塾大学)

地球温暖化は今や地球上の全ての人に係わる重大問題と認識されています。ハリケーンや台風が大型化しているのも、豪雨や干ばつが激化しているのも、地球温暖化に絡めて語られており、日本の近年の暖冬や、初夏に上陸する台風なども、真偽はともかく温暖化との関連が語られています。しかし、高緯度北極域などで見られる氷河の後退は、温暖化に関連して語られる出来事の中でもっとも顕著で劇的な現象です。

植物生態学が専門で、国立極地研究所でポストドクをされている上野健さんは、高緯度北極氷河末端域の、氷河が後退しつつある裸地に、最初にどんなコケ植物が侵入してくるかを調べようと思いました。スピッツベルゲン島ニーオールスンの東プレッカー氷河の末端域の裸地に、コケ孢子発芽用の寒天培地を並べて数週間放置し、それを回収してもちかえり、2ヶ月培養を続けました。すると、無性芽などの大型繁殖体は実体顕微鏡で確認できなかったものの、やがて蘚類の原系体コロニーが確認できました。これは、放置していた間にシャーレの中に蘚類の孢子が舞い込んだことを意味します。

これらの原系体は、裸地に最初に入ってくるパイオニア的な種類の蘚類だろうと推測できましたが、種類まではなかなかわかりません。そこで、上野さんと私は、原系体からDNAを抽出し、コケ植物では一番情報が蓄積している *rbcL* 遺伝子の塩基配列を解析して、塩基配列から何ゴケの仲間かを調べることにしました。まさにはやりのDNAバーコーディングです。

さっそくいくつかの原系体コロニーについて解析したところ、互いに類似しているものの、数通りの塩基配列が見いだされました。調べた塩基配列をわくわくしながら相同性検索にかけたところ、出てきた結果は衝撃的なものでした…。なんと、どの配列も、オオツボゴケ科の蘚類の様々なグループに極めて近縁だったのです。

オオツボゴケ科というのは、ニュースレター

No. 24 のこのコーナーで私が紹介した、ハエに孢子を運んでもらう「くさいコケ」、マルダイゴケを含むグループです。マルダイゴケの *rbcL* 遺伝子の塩基配列とまったく一致したサンプルもありました。オオツボゴケ科は別名「糞ゴケ」と呼ばれるグループで、科内に孢子散布をハエに依存する種が数多く存在します。

どうやら当初の意図とは違って、寒天培地にオオツボゴケ科蘚類の孢子をたくさんくっつけたハエがたかったことから、こういう結果が得られたようです。しかし、よく調べてみると、そうとう離れたところにしか生育していない種類の原系体や、スピッツベルゲン島から報告のない属に近縁な原系体も生えていたようです。当初の目的とは違いますが、瓢箪から駒というべきか、ハエによる糞ゴケの孢子散布についての興味深いデータが得られそうです。くさいコケとのつきあいをもう少し続けてみようと思っています。

## 参考文献

- 上野健・有川智己・内田雅己・神田啓史. 2006. 高緯度北極における氷河末端域へのコケ植物の侵入動態. 蘚苔類研究 9(4): 123-124.
- 上野健. 2006. 高緯度北極ツンドラにおける糞ゴケの孢子散布パターンの解明. 極地研 NEWS (180): 8.



糞ゴケの一種、ユリミゴケ *Tetraplodon angustatus*. 2006年9月21日、北海道のアポイ岳で。撮影：有川智己。

### 韓国の美味しい種・3

Park, ChanHo (パクチャンホ)(九州大学)

今回は韓国の「お茶」の話をして。「どこまでも健康に良い事が好きらしい」。これは私がいつも感じている我が国の率直な印象だ。医食同源、薬食同源。食事の場面ではいつもこの言葉を感じるメニューに出会う。韓国のデパートの地下食料品売り場ですら、「○○に効く○○茶、体に良い○○茶」といった説明で色々なお茶が売られている。韓国では最近になって日本の緑茶や中国茶の気が高まっているらしい。日本でも今、空前の健康ブームだが、なにやら若い人達に限ってはそれが一つのファッションにすらなっている感じがする。韓国では日常的に「体に良い」ということを意識していることが、日本との大きな違いだろう。日々の食事から、お茶やお菓子でさえも「体に良い物を」と意識をしているからだ。今も昔も変わらずに飲まれている伝統茶もその一つだ。韓国では緑茶など茶葉を使った物を「お茶」、それ以外の親近な食材や漢方の素材を使ったお茶を「伝統茶」と呼ぶ。韓国の食事処で食事の後によく出される水正菓(スジョンガ)は干し柿、シナモン、ショウガの入った飲み物で、頭痛や喉の痛みに効く。また、ほんのり甘いなつめ茶は滋養強壮、老化防止に効果がある、といった具合に一つ一つに効果があるのだ。効果があるといってもこれらは薬ではなく、あくまでも「お茶」として楽しまれているのである。疲れたときやちょっと一息つく時、食事の後にと日々の生活の中で気軽に飲まれているのである。数年前から伝統茶として知らされ、よく売られる商品にまでなったのが「ドングレ茶(アマドコロのお茶)」だ。韓国ではアマドコロ(*Polygonatum odoratum* var. *pluriflorum*)の根を乾燥して細かく切ったり、粉状にしてお茶にする。私が「ドングレ茶」を初めて知ったのは12年前の夏である。当時私の所属していた分類学研究室で、ナルコユリ属を研究していた先輩と共に江原道(カンウォンド)地域の調査に出かけて、最後の調査地である五台山(オデサン)に行った時だった。ハードなスケジュールだったので、私たちは調査の途中で採集した物を整理しながら一休みを取った。静かなお寺に入り、お坊さんにお願

いしてお寺の庭の片隅で採集した物を整理しながら休んでいた。その時、お坊さんが先輩の採取物のアマドコロを見ながら「あなた達、それはお茶にするとうまいよ」と声をかけてきた。その時はまだ「ドングレ茶」はあまり知られておらず、お寺でたまにお客さんに出すお茶の一つであつたらしい。私たちも早速、お寺の手作りのドングレ茶を頂いた。飲み始めは麦茶のような感じがしたが、これは麦茶より香ばしくて本当に飲みやすいものであつた。飲めば飲むほど、今までどうしても取れなかった夏の暑さによる喉の渇きが徐々になくなってきた。お坊さんの話によると、このお茶は滋養強壮や疲労回復に効能があり、喉の渇きをいやす効果もあるらしい。昔からお坊さん達は修養のために山奥にお寺を建ててきた。そのためお客さんが山奥のお寺まで来た時に、このようなお茶を出してお客の心身が共に癒されるようにと氣遣つたという話だった。その話を聞いて、お寺の庭の日当たりの良い片隅でアマドコロや色々な植物の根が干してある意味がやっとわかつた。

今がどれだけ世知辛い世の中になつたとしても、静かに流れる木魚と読経を聞きながら一時の休憩を頂けるお寺は、まだあると信じたい。



上. 韓国江原道五台山のアマドコロ。  
下. 田舎の民家でアマドコロの根を乾燥しているところ。撮影：ともにパクチャンホ。